

榊原報告・東村報告へのコメント

道場 親信

目次

1. 榊原報告へのコメント

- (1)いくつかの前提
- (2)思想の科学への「生活記録」の導入について
- (3)「生活記録」的方法は、鶴見俊輔の方法の一部になったか？
- (4)ひとびとが「書く」ことへの鶴見の関心と態度

2. 東村報告へのコメント

- (1)文字記録と写真記録
 - (2)被爆体験と生活記録
 - (3)鎌田定夫の方法と運動経験
 - (4)「証言運動」という運動のスタイルと言説の位置づけ
- ### 3. 「生活記録」の歴史的位置づけをめぐる
- (1)「詩」と「生活記録」の評価軸
 - (2)近代産業部門における「生活記録」のつまらなさ、成立しがたさ
 - (3)「生活記録」と他の運動との関わりについて

第7回戦後文化運動合同研究会（於：奈良教育大学）の第1セッション「生活記録と〈運動〉」における榊原理智報告と東村岳史報告に対し、コメンテーターとしていくつかの点についてコメントしておきたいと思います。

1. 榊原報告へのコメント

(1) いくつかの前提

私自身が思想の科学研究会員であり、会内で思想の科学とサークル運動についての研究会を5年以上続けてきた者として、榊原報告は刺激に富んだ問題提起でした。この間自分で考えてきたことや上記研究会で議論してきたことがらをもとに、「思想の科学」と「生活記録」の関わり、とくに鶴見俊輔と「生活記録」について、いくつかのコメントをすることにいたします。

まず、「思想の科学」と「生活記録」、とくに鶴見俊輔と「生活記録」という問題を考える上で、いくつかの前提が必要であるように思われます。第1に、雑誌『思想の科学』だけではなく、「思想の科学研究会」の動向を併せて考える必要があること（以下、両者を合わせて「思想の科学」と表

記する）、とくに雑誌は取次を通さずに頒布された「第二次」（『芽』）を除き、商業出版物として発売されたものであり、雑誌の誌面動向がただちに「運動」としての「思想の科学」のあり方を示すわけではないということを考えておく必要があると思います。と同時に、思想の科学研究会に集ったさまざまな書き手たちにとって『思想の科学』誌は論考の発表場所であるとともに、サークルや研究会において集团的に探究されたテーマを発表していく場でもありました。これが第2の点です。『思想の科学』誌と研究会活動の関連は、雑誌の誌面ばかりでなく、『思想の科学会報』を読み、関係者へのインタビューを重ねることで立体的に明らかにされていく必要があるでしょう¹。

(2) 思想の科学への「生活記録」の導入について

『思想の科学』誌に「生活記録」をめぐる論文・記事が掲載されるようになるのは、「第二次」と呼ばれる『芽』（建民社発行）の時期です。これに関連して前後の時期を整理しておく、「第一次」と呼ばれる『思想の科学』（先駆社発行）の刊行時期は、1946年5月から51年4月までであり、刊行がストップしてから約1年半後の1953年1月、建民社から『芽』と改題して刊行、これも約1年半刊行して「第三次」である講談社版（1954年5月～55年4月）の刊行に至ります。講談社版の時期は、竹内好編集長のもと「大衆化路線」²の編集が行われた時期であるといわれていますが、部数は伸びず、1年で刊行打ち切りとなりました。その後3年9か月雑誌の出ない時期があり、1959年1月から中央公論社版（「第四次」）刊行となります。

先駆社版末期から建民社版への時期と、講談社版から中央公論社版までの間の時期は、もともと雑誌刊行から始まった「思想の科学」にとって「危

¹ この点に関しては、筆者は2006年より「思想の科学サークル戦後史研究会」を思想の科学研究会内に立ち上げ、共同研究を進めている。数年以内に最初のアウトプットを出版する予定である。

² たとえば、鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの：鶴見俊輔に戦後世代が聞く』新曜社、2004年、214ページ。

機」を抱えた時期でした。というのも、全国メディアである雑誌の定期刊行が止まれば、雑誌を活動の場としてきたこの運動もまた停止してしまう危険性を抱えていたからです。

先駆社版の末期、雑誌の部数が落ち込んで継続刊行の危機に陥ったとき、鶴見俊輔は雑誌の今後について丸山眞男に相談したことがあります。これに対し丸山は、「支部をたくさんつくって、その支部の一つ一つから、ライターを求めて、やっていけばいいじゃないか」と提案したということです³。これ以後、大阪支部をはじめとして、読者による「支部」や読者会、その他のサークルが作られていきます。当初7人の同人から出発した「思想の科学」は、1949年7月に社団法人思想の科学研究会を設立し、会員が入会できる組織の形を整えています⁴。この間鶴見は「鬱」の時期に入って京都大学助教授を辞任したり、54年12月からは東京工業大学助教授として東京に転居するなどの生活上の変化も経験しています。

『思想の科学』誌への「生活記録」をめぐる論考の掲載に関連しては、1951年の『山びこ学校』⁵の刊行とそのインパクトを無視することはできないでしょう。ただし、誌面の上で取り上げたとはいっても、会としてこれを共同研究したり、雑誌として編集上の見解を示したりしているわけではありませんでした。鶴見和子が1952年から生活記録運動に積極的にかかわるようになることは周知の事実です。こうした動向の中で、榊原報告にあったように、『芽』の誌面には「綴方」「生活記録」が掲載されるようになり、それは講談社版にも引き継がれ（「生活綴方」の特集も組まれている）、講談社版廃刊後4年のブランクを経て中公版（第四次）が発刊されるまでの間に拡張した「生活記録」的手法によるサークル活動が「思想の科学」運動の中では活性化していきます。

この「第三次」から「第四次」の間の時期、つまり50年代後半の時期に多様なサークルが生まれ活性化した状況については、現在「思想の科学サークル戦後史研究会」で共同研究を進めており、詳しい成果については、近い将来に刊行される予定の論集を待っていただきたいと思います⁶、さしあたり次のような形であらましの経過をまとめておきます。

『思想の科学会報』によれば、講談社版の時期から無審査・推薦人なしでの「会員」が拡大し（「大衆化路線」）、研究活動レベルの低下などの問題が生じたことがうかがわれます。そうした中、雑誌休刊後に求心力を失う中で研究会活動を継続するため、拡大した思想の科学研究会をさまざまなテーマの小研究会に分割し、連合させるという研究会の再組織案が提示され、サークル・研究会活動が活性化していくという経過をたどりしました。

こうして生まれた様々な研究会で、「列伝」づくり、「身の上相談」研究、「転向」研究、「群像」づくり、「自伝」づくり、「記録の方法」研究などの新しいテーマが扱われ、ひとびとのライフヒストリーを自ら記したり、他者の「伝記」を記述したりなどの作業が共通に模索されました。そこには「生活記録」がサークルにおける共同作業を支える方法として受容された様子が見てとれます。なぜそうなったのか、「生活記録」的方法は期待された成果を上げ得たのかについては今後の検証が必要です。

(3) 「生活記録」的方法は、鶴見俊輔の方法の一部になったか？

では、「生活記録」的方法は鶴見俊輔の思索の方法になったのでしょうか？ 結論的に言えば、それはなかったのではないかと私は考えます。この点について、鶴見のいくつかの発言から考えてみたいと思います。

まずは鶴見が「生活記録」について最初にまとまった発言を行なったものの一つと考えられる久野収との共著『現代日本の思想』⁷から2つの発言を見ておきましょう。

³ 鶴見・上野・小熊前掲書、210ページ。同様の記述は鶴見俊輔『期待と回想：語り下ろし伝』朝日文庫、2008年（初版は晶文社、1997年）、585ページにもある。

⁴ 社団法人思想の科学研究会は2013年5月に解散し、現在は任意団体として活動を継続している。なお、『思想の科学』誌の各時期の動向については、記念シンポジウムを記録する会編『読む人・書く人・編集する人：『思想の科学』五〇年と、それから』思想の科学社、2010年を参照。

⁵ 無着成恭編『山びこ学校：山形県山元村中学校生徒の生活記録』（青銅社、1951年）。

⁶ 注1に同じ。

⁷ 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想：その五つの渦』岩波新書、1956年。

戦後の『朝日新聞』の「ひととき」欄、人生雑誌の生活記録は、あたえられた三枚、あるいは十枚の紙面の上で、一つの感情的なしめくくりをつけ、単純な像をつくることによって終らなければいけないという動機をになわされている。その結果は、しばしば、月並短歌と似た、むりな単純化、定式化を、日常の事にたいしてこころみることになる。人生雑誌や生活記録にたいする文学者の反撥は、複雑な構造、多様な手ざわりをもつ人生を、このようにむりじいに幾つかのイガタにはめて表現してしまって、それで現実把握ができたつもりでいることにたいする批判に根ざすものである。今日の人生雑誌には、全国のたくさんの俳句雑誌、短歌雑誌と同じような定型性がみられる。このような感情表現の定石をうちやぶることが、現在の課題であろう。[…]生活綴り方運動は、やはり、まず第一に私家版として、長さのきまりなく書きつづけられ、一定の時がたってから仲間であろうどくされたり、文集となって公開されるので正しい形と思う。ジャーナリズムの中にくみいれられてしまえば、きばを失うことになる。⁸

「平和」とか、「国土防衛」とか、「民主主義」、「自由」などの抽象的な意味をもつ諸記号はそれが誰によってどのような条件で言われたのかとむすびつけて意味内容をにくづけすることによって、プラグマティックなものとしてすることができる[…]。このような訓練が、小学校においても、中学校においても、組合においても、公然となされることを通して、生活綴り方と生活読み方との双方に同じく力点をかけた、攻撃的・防禦的な、新しいプラグマティズムの誕生が準備される。⁹

以上を読むかぎり、「生活記録（綴方）」は「ひとびと」としての方法ではあっても、鶴見の方法ではありません。生活記録運動に投企することで人々の主体を革新し、さらには自らの主体の革

新をも希求した鶴見和子¹⁰とは異なり、俊輔は「生活記録運動」の外側から興味を持って眺めています。それは鶴見俊輔自身の回想によれば、「分析的方法」から「例示的方法」へと転換した（『期待と回想』¹¹）という、彼の戦後の方法転換と関連するものではありません。が、それは「生活記録」的方法（生活を書き、書くことを通じて主体を革新する方法）によって自らの思想と論理を構成する—「記号論」に見られるような意味での思索の方法—というよりも、人びとを生活の持続と変化の双方においてとらえ、その生の“急所”をとらえたり、人間の生活や思想を理解する上での素材を提供するものであり、「方法」という点に關していうならば、「集団」「サークル」を組織する方法に關わる問題であるように思われます。「例示的方法」なるものにとって、「生活記録」はそれ自体「方法」というよりも、素材を提供するものであり、それは鶴見自身によって再構成されることにより、初めて意味を持ちます（鶴見による再構成を拒む力を持った稀有なテキストには、「思想」としての資格を認めることに彼はやぶさかではないでしょう）。そして実用的意味で言えば、鶴見にとって「生活記録」的方法は、何より雑誌『思想の科学』と思想の科学研究会のガバナンスに關わって当面の有効性を持っていたように思われます。

次に、久野収、藤田省三との共著『戦後日本の思想』¹²における鶴見の発言から、「生活記録」に關する視点の特徴を確認してみることになります。その第1は、「生活記録（綴方）」の運動から「指導者意識」を克服したリーダーの型が生み出されたことに對する注目です。鶴見はとくに無着成恭が採った「教育方法としての平等主義の原則」に注目して、次のように言います。

無着成恭の方法は、自分が間違っていた時は、しゃべりながらも、“あ、先生が間違った”と、子供にあやまる。これは戦前にはあり得なかった、非常にオリジナルな方法なんです。教

⁸ 同書、104-105 ページ。

⁹ 同書、107 ページ。

¹⁰ 和田悠「1950年代における鶴見和子の生活記録論」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第56号、2003年。

¹¹ 『期待と回想』166 ページ。

¹² 久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』中央公論社、1959年。なお、引用は講談社文庫版（1976年）による。

師は詫びることによって常に平等の地点にかえる。人間の本来の相は平等なんだ。ところが教育をしなければならないとか、政治をしなければならないという、暫定的な目的のために不平等な仕組を仮に作る必要がある。しかし、その仮の不平等は、当面の目的である一つの仕事が終わると同時に、すぐに打ちこわされ、撤去されねばならない。これが無着成恭の方法です。これによって指導者意識を排除して行くやり方が出て来た。この方法は、教育に影響をあたえただけでなく、ひろく思想の領域一般に影響をあたえ、この数年のサークル運動の哲学はここに始まったと言えます。¹³

「指導者意識」とは、鶴見にも大きな影響を与えた竹内好¹⁴が日本の近代知識人を批判する際に用いたキーワードでした。この「指導者意識のないリーダー」は同時に「どんな場合にも下位集団から決して抜けないリーダー」、つまり「立身出世」的な上昇志向とは切り離され、集団の中で・集団とともに歩む型のリーダーであります。この新しいリーダーの型の中に「この数年のサークル運動の哲学」の原型があるのだ、と鶴見は主張しているのです¹⁵。

第2に鶴見は、「生活記録（綴方）」を記録芸術運動へと広がってゆくものとしてとらえています¹⁶。その要点は「思想を必ずしも文章とだけ結びつけて考えず、あらゆるコミュニケーション・ルートと結び付けて考えてゆく方向」という性格規定にあります。「記録」という行為をその方法も含めて「思想」の可能性の展開として位置づける視点といえます。

第3に、「生活記録（綴方）」はある種のアイデンティティ・ポリティクスとして意味を持つものであると鶴見はとらえています。鶴見は次のように言います。

今の生活綴り方運動の方法だと、存在自体が問題ををはらんでいなければ、いい生活綴り方は書けっこない。都会の小ブルジョアが書きはじめて一生懸命「ひととき」に投書するんだけど、必ずしも成果は上ってないんだ。一方、東井氏にしても無着氏にしても、僻地の小学校から出てくるから、問題が深刻になるんですよ。¹⁷

しかし同時に、鶴見はそこで表現されるものが近代的な諸価値をゆさぶるものであるということをも主張するために、それが「原始共同体的なもの」という主張をしています。「生活綴り方運動は、近代以前のものの、非常に見事な近代的な復活としてとらえなければだめですよ」と¹⁸。鶴見にとって「生活記録（綴方）」とは、近代社会においてよく規律訓練された主体の表現としては力を持ちえず、逆に規律を拒否しずらす抵抗の表現、近代に埋め込まれようとした周縁的主体による、敵の武器を借りた逆襲であるのとらえられているのではないのでしょうか¹⁹。

第4に、鶴見は「生活記録（綴方）」の可能性を伝統的なものと近代的なものの「結合」という点に見ています。鶴見は『現代日本の思想』でも指摘された、「生活記録」がもつ「月並」化の弊害が、戦後においては指導者の「民科」的作風と結びつくことで増幅されているという指摘をします²⁰。「生活記録（綴方）」は一方で「本質的に復古思想なんだし、原始共同体の再発掘」であるとともに、

¹³ 『戦後日本の思想』184 ページ。

¹⁴ 同。ここには中谷いづみが指摘する、「生活記録（綴方）」の主体に向けられたプリミティヴィズムの視線を読み取ることができるかもしれない（中谷『その「民衆」とは誰なのか：ジェンダー・階級・アイデンティティ』青弓社、2013 年）。

¹⁵ この点については、鶴見の視点をプリミティヴィズムと規定することをためらわせる要素を見ないわけにはいかない。鶴見にとっての「日本語」の意味、つまりネイティブの言語空間から疎外された言語活動者としての鶴見にとっての「日本語」が持つ意味を考えると、「原始共同体」という表現は過剰であるとしても、訓育されざる人々の共同の生活空間が存在することの希望に託した表現であるとすれば、より面白く読めるのではないか。ただし、あくまで鶴見はそれを外から眺める観察者・分析者の位置にいるわけだが。

²⁰ 『戦後日本の思想』172、189 ページ。

¹³ 前掲書、158-159 ページ。159-160 ページにも同様の発言がある。

¹⁴ 鶴見俊輔『竹内好：ある方法の伝記』リプロポート、1995 年。

¹⁵ いずれの引用も『戦後日本の思想』159 ページ。

¹⁶ 前掲書、164 ページ。1950 年代の多様な表現行為を「記録」という観点から読み解く視点については、鳥羽耕史『1950 年代：「記録」の時代』河出書房、2010 年を参照。

他方で「プラグマチックなものがある」。後者の「近代的技術的」側面と「復古」的なものの「二つの流れの結合として」とらえるべきであるのに、文科では近代主義的にしか「生活記録（綴方）」をとらえない。そうであるがゆえに形式的で技術主義的なワンパターンに陥ってしまうのだと指摘するのです²¹。これに対し、鶴見が評価するのは無着成恭や東井義雄といった指導者でした。「実作としてすぐれたものを出しているのは、無着氏のような禅坊主みたいな人物でしょう。東井氏の仕事も浄土真宗の流れから出て来ている」と²²。つまり、伝統と近代を結びつけた新しい主体の可能性を開く方法として「生活記録（綴方）」を評価しています。ただし、それは誰にも可能な作業ではありません（鶴見にとって採用可能な方法ではない、ということです）。鶴見はそのような表現を生み出す主体として自らを考えているわけではなく、さまざまな障壁を越えて現れ出た多様な主体の表現から、自らを束縛する近代的な規律を超える表現と主体の可能性を読み取ることに興味関心の場を持つようになった、というのが事実に近いのではないかと思います。「伝統」への注目は単純なプリミティヴィズムというよりも、そのような関心の持ち方として理解すべきではないでしょうか。

(4) ひとびとが「書く」ことへの鶴見の関心と態度

そうした点からふりかえてみると、『思想の科学』本誌刊行が途絶えていた 1956 年から『中央公論』誌に「日本の地下水」²³の連載を始めたことには、鶴見なりの新たな視点の設定とその具体的な応用としての意味があったように思われます。鶴見はこの欄で、ときに過剰な“悪乗り”をしながら、多様な雑誌を“面白く”読み解いていきました。この“面白がり”の姿勢は、その後の「思想の科学」を長く支える基本的な態度となり、また広く薄く「思想の科学」に共有されていったものだといえます。

ひとびとが「書く」ということに関し、初期「日

本の地下水」を読むかぎり次の 2 つの意味があるように思われます。第 1 に、ひとびと自身が「哲学（つまり思想）」をもつこと、またそれを表現すること、そのプロセスが記された記録としての面白さ。第 2 に、「書く」場所、「書く」関係性、「書く」行為が物質化される場としての集団（つまり広い意味のサークル）への関心。俊輔にとって「生活記録」、つまりひとびとが「書く」という行為に関しては、和子のように生活記録の方法に自らを同一化する（生活記録の方法を通して思想と主体を形成する）ことはなく、生活記録の方法によって生産されたテキストの読解を通じて思想と主体の可能性を探る、つまり媒体としてのテキストを通じて垣間見える主体と思想の可能性に関心を持ち、観察の対象とした、というべきなのではないかと考えています。

そして、同時期の思想の科学研究会では多様なサークルが「生活記録」の方法に関心を持ってサークルの活動を組み立てていました。多様なサークルがゆるやかに共通の関心で結ばれ、互いに相重なる活動を積み重ねながら、新たな思想の主題を練り、新たな「書き手」を育てていきました。その意味で「生活記録」の方法は「思想の科学」にとって何よりもガバナンスを支える一つの方法となったといえるでしょう。ただし、その時期性急に追求された「自伝」「伝記」「生活記録」の叙述がそのまますぐれた表現を生み出したわけではないことに注意が必要ですし、鶴見は必ずしもそのような可能性は信じてはいなかっただろうと思います。この点についてはこのぐらいにしておき、これ以上の考察は別な機会に行うことにしたいと思います。

2. 東村報告へのコメント

東村報告に対しては、いくつか問題提起と質問の形でコメントすることにしたいと思います。

(1) 文字記録と写真記録

東村報告では、文字記録と写真記録とが並行的に扱われていますが、両者の関連について仮説的にでも説明をいただけないでしょうか。辻さんのコメントにもある通り、「生活記録」ということばは独自の意味合いを帯びた歴史的な概念であり、

²¹ 同、189 ページ。

²² 同。

²³ 『中央公論』誌上での連載は、1956 年 4 月～59 年 10 月号。『思想の科学』本誌には、1960 年 1 月から 81 年 3 月号まで続いた。ここで紹介した中央公論版「日本の地下水」については、注 1 でふれた「サークル戦後史研究会」で共同研究中であり、いずれ成果が公表される予定である。

単に「記録」一般のうちから文字記録を抜き出したものではないはずです。両者を総合する「記録」概念が提示されると議論が整理されるように思いますが、この点についてお考えをうかがいたいと思います。

(2) 被爆体験と生活記録

東村報告の中では長崎の被爆体験記録を中心に議論がなされていますが、被爆体験が「生活記録」と呼ばれるゆえんはどういうものか、この点もお考えをうかがいたいと思います。

(3) 鎌田定夫の方法と運動経験

鎌田定夫の文章を読むと、彼の「生活記録」の方法はかつて「日本生活記録センター」で活動とともにした鶴見和子のそれとともに、谷川雁的な方法（運動論）が加味されているように思われます。たとえば、次の断片からは鶴見和子のな方法²⁴との共通性が浮び上がってきます。

大事なことは、それを単に個人の密室のなかでの作業としてでなく、可能なかぎり家族や仲間たちとの対話のなかで何回も書き改めながら、一そうの正確さとふくらみを増すように努めることであり、そのためにも一回きりのものとしてでなく、たえず新しく書き加えられていく持続的作業として進めることが期待されるのである。²⁵

つまり、仲間たちとの持続的な対話とこの持続を通じた主体の変容、という考え方です。そして、この主体の変容という点に関しては、谷川雁が『サークル村』の運動の中で積極的に提唱したように²⁶、異質な存在同士の衝突と相互批評を通じた新たな連帯の形成、そうした質を持つ「交流」を運動として推し進めるというビジョンを鎌田は持っていました。

一般に作家の仕事が現場に取材しても最後は密室の中での個人的作業であると云われるのにたいして、大衆的記録運動では、集団のなかでたえず相互批正しながら書きあっていくことが大事であり、そのことが単に記録の密度を高めるだけでなく、自己確立と新しい連帯への相互変革を進めていくことと不可分の関係にあると言えよう。²⁷

『サークル村』の経験は、この運動が崩壊して以降も仲間を募って継続することを画策したように、鎌田にとって重要な意味を持っていたように思われます²⁸。彼が『九州通信』の中で述べている問題関心は、大いに『サークル村』的（谷川雁的）でした。その彼が被爆者運動と関わり、被爆者の証言を記録する運動に関わっていったとき、原水爆禁止運動の分裂や被団協の動揺といった運動の大きな文脈の中で、どのような政治的・運動論的思考を展開していったのか。もう少しお話をうかがいたいと思います。

(4) 「証言運動」という運動のスタイルと言説の位置づけ

サークルの文学運動や多くの生活記録運動がそうであったように、集まった人々が「書く」ことを目的とすれば、そこに仮に主体の変容が生じたとしても、小集団における相互批評、自家消費で終わる可能性が大きくなります。そして現に大多数のサークルは小集団の中での表現活動で終わっていききました。ですが、原爆体験の「証言」という言語表現は、「世界」に向かって語られる性質を持っています。見知らぬ人々、まだ生まれぬ人々（もう死んでしまった人々？）がその想定上の「聞き手」となることに大きく開かれているのです。本来「書く」ことは、多数の人々に語り・伝えることでもあります。「証言運動」はそうした側面に

²⁴ 鶴見和子『生活記録運動の中で』未来社、1962年。

²⁵ 鎌田定夫「ナガサキ・七〇年代の記録と証言運動：四半世紀目の証言と記録にみる新しい軌跡と展望」「時代を生きて」刊行会編『時代を生きて』同刊行会、2006年（初出、『長崎の証言』1971年）、69ページ。

²⁶ 水溜真由美『『サークル村』と森崎和江：交流と連帯のヴィジョン』ナカニシヤ出版社、2013年。

²⁷ 鎌田前掲論文、72ページ。また、鎌田定夫「方法の変革と運動の可能性」『時代を生きて』所収（初出、『九州通信』創刊号、1961年）には、60年安保後の「新左翼」に近い立場からの状況論が述べられていて、興味深い。

²⁸ 東村岳史「『生活記録』から「証言」へ：「長崎の証言の会」創設期と鎌田定夫」『原爆文学研究』第11号、2012年参照。

大きく開かれた運動であったといえるのではないのでしょうか。この点は、「生活記録」一般が必ずしも帯びているわけではない言説の特質であると思いますが、こうした点からこの運動をふりかえったときに見えてくるものは何か、ご教示いただければと思います。

3. 「生活記録」の歴史的位置づけをめぐる

最後に、報告者お2人と会場の皆さんも含めた全体にいくつかの問いを提出しておきたいと思います。問いかけの中心は、「生活記録」を「資料」として読むのは研究者の視線であり、表現それ自体を愉しむ、享受する視点はあるか？ という点にあります。

(1) 「詩」と「生活記録」の評価軸

これまでもさまざまな場所で議論されてきたように、膨大に書かれた「生活記録」の言説をどのように評価するのか？ という問題が第1にあります。「おもしろい／つまらない」「うまい／へたくそ」「重厚／軽薄」……といったさまざまな対立軸で切り取られてきた人々の言語表現を、別な形で分節化することは可能でしょうか。

ここで紹介したいのが、「生活記録と文学」論争と呼ぶべき論争です。ここでは『文学』誌の上で紹介された論文を軸に、この論争について考えてみたいと思います。『文学』誌では1956年3月号で「生活記録と文学」という特集を組み、両者の関わりに関して多様な論者の論文とともに、一般からの論文を募集しました。同号には片山悠・上野瞭他による「生活記録と文学」と題した論文が掲載されていますが²⁹、ここでは京都文学教室での「生活記録」の位置づけをめぐる議論が詳しく紹介され、筆者による独自の運動論的位置づけが示されていました。

これに対し、同じ号で小野十三郎がコメントをしています。大阪文学学校でのチューターの経験も踏まえながら、京都で「生活記録」に関して議論されていることが、大阪で「詩」に関して議論してきたこととパラレルな関係にあり、そのことがかえって両者を同じように論じてしまうことに

対する疑問を惹起する、という問題提起です。

京都文学教室が生活記録、生活記録というその生活記録という言葉、詩という言葉に置きかえたなら、全面的になつとくできるような気がする。即ち、三〇年間、詩を書きつけてきた私は、詩は、初歩的な体験の記録から、集団の中の話し合いを通じて、経験の批判、検討、集積、そして推論と発展する中で、何らかの形で、現実を変革しようという行動なり、あるいは抵抗なりを伴う自己形成であり、思想形成である、という風になら、自分にも人にも言うことができるし、実際に、生徒に向ってそう云ってきた。ところが、ここに地から湧いたように、突如、「生活記録」なるものが出現して、私が今日詩について考えていることと同じようなことを云ったのだから、少しとまどった気持は、京都文学教室の指導者諸君にもわかってもらえるだろう。そういうわけで、生活記録を、新しい文学の本質の芽生えと見る京都の考え方は正しいと思いながら、なおその生活記録という言葉にいささか私はこだわるし、意味のすりかえを感じもする³⁰。

小野は詩と生活記録との間に相違があると感じ、「詩」は文学であるとしても、同じことを「生活記録」に関して言うことができるのだろうか？ と問いかけています。もとより、三重県の東亜紡織の「生活を記録する会」でそうしていたように³¹、生活記録は文学ではない、と割り切ってしまうような問いが生じるはずありません。ですが、文を書く、という「文学」へのあこがれをもった人々にとってもこの時期「生活記録」はひとつの方法であると考えられていました。文章の持つ魅力をすべて「文学」という言葉が掬いきれるわけではないにしろ、すぐれた文章を書こうとするかぎり、「文学」というカテゴリーは魅力を放って絡んでくるでしょう。そして多くの「作文指導」「綴

²⁹ 片山悠・上野瞭他「生活記録と文学：京都では生活記録はどう進められてきたか」『文学』1956年3月。

³⁰ 小野十三郎「生活記録のむつかしさ：京都における生活記録の進め方の報告を読んで」『文学』1956年3月、68ページ。

³¹ 澤井余志郎『ガリ切りの記：生活記録運動と四日市公害』影書房、2012年。

方教育」「生活記録運動」の現場では、両者は曖昧に星雲化していたのではないのでしょうか。

これに対し、無着成恭は「綴方は作品じゃない」と語り、明確に両者を切り離しています³²。また、関根弘は「自分の身のまわりのことを書く生活綴方を自然にひきのばして行っても革命的な実践は出てこない」と語り³³、言葉によって世界を切り裂く言語表現としての「文学」から生活記録を除外しました。これは「文学」の側からの切断といえます。石母田正は、「生活綴方」があくまで指導を必要とする表現行為であり、表現者は自立できていないと指摘しています³⁴。この主体の従属性に関しては、中谷さんも一あくまでメディアで消費される想定上の、という条件付きですが—「生活綴方」の主体のあり方がはらむ問題として指摘しているところです。ですが、この点をもう一度転換しておくならば、榊原さんが指摘するごとく、「書く行為が持つ両義的な性質」、つまり「書く」行為による解放の側面と、「書く」主体となることが何らかの規律化への順応でもあるという近代主体の二重の問題を考えると、「自立／従属」という問題はそれほど容易に二分できるものではないということをもふまえる必要があるのではないのでしょうか³⁵。

(2) 近代産業部門における「生活記録」のつまらなさ、成立しがたさ

先に見た鶴見俊輔の発言にもあるように、“面白い”「生活記録」は主体が問題を抱えたところでしか書けない、という意見があります。「生活記録(綴方)」はどこでも成立するわけではない、という問題に関しては、さまざまな指摘がなされてきました。無着成恭は綴方は農村でしか成り立たないと語っています³⁶。また、針生一郎は、近代産業部

門の労働者は生活記録よりも詩や小説を書きたがる、と指摘しています³⁷。これらは何を意味しているのか。そこには素材や主体の問題、「書く」欲望の問題、「書く」場の問題、言語的規律化の問題など、様々な問題が重層しているのではないかと考えられます。この点について議論ができればと思います。

(3) 「生活記録」と他の運動との関わりについて

「生活記録」を書く、という行為に関し、それを書き上げることに自足するのではなく、他の社会運動と関わりを持つような志向がしばしば持たれました。たとえば労働組合との関わりがそうです。また、草の実会や原水爆禁止運動のように、女性の学習サークルや作文サークルが社会運動に関わりを持っていくようなケースもしばしば見られました。辻さんが指摘するように、「生活記録運動」は青年団運動の中で生まれ、全国的な広がりを持っていった言葉です³⁸。農文協の運動や識字の運動も、「生活記録と〈運動〉」という視点から読み直していくことが可能でしょう。そうした多様な「書く」ことと運動とのつながりの回路は、社会の変化とともにどのように変容していくか？ この点についても時間があれば皆さんと議論したいと思います。

(みちば ちかのぶ・和光大学)

³² 上原専祿・国分一太郎・石母田正・武田清子・日高六郎・三浦つとむ・無着成恭・武谷三男・高橋甫・関根弘・駒尺きみ・乾孝・磯野誠一・幼方直吉・鶴見和子・鶴見俊輔「座談会・生活綴方運動の問題点」『思想の科学』1954年8月、35ページにおける無着の発言。

³³ 前掲座談会、37ページにおける関根弘の発言。

³⁴ 石母田正「新しい歴史をつくる」『思想の科学』1954年8月。

³⁵ 榊原理智『「山びこ学校」というユートピア：一九五〇年前後における〈書く主体〉の創出』『日本文学』第56巻11号、2007年。

³⁶ 中谷いずみ・榊原理智『「山びこ学校」という教育法：

無着成恭氏に聞く」西川祐子・杉本星子『共同研究 戦後の生活記録にまなぶ：鶴見和子文庫との対話・未来への通信』日本図書センター、2009年、26ページにおける無着の発言。

³⁷ 針生一郎「「生活記録と文学」をめぐる：日本文学学校の体験から」『文学』1956年4月。

³⁸ 辻智子「1950年代日本の社会的文化的状況と生活記録運動：生活記録運動の系譜に関する考察(2)」『神奈川大学心理・教育研究論集』第29号、2009年。